

2020年度 自己推薦（後期）入学試験

歴史文化学科	小論文	受験番号						氏名	
--------	-----	------	--	--	--	--	--	----	--

歴史学のもうひとつの大きな特色は、物事を原因と結果という因果関係で分析し説明することです。すなわち、物事の発生には必ず、それを引き起こす原因があり、それが結果にさらに繋がると見なします。そして、ここが歴史学の面白いところですが、その原因には、必然的な原因と偶然的な原因の双方があります。前者は、物理学と同じように、ほぼ例外なく、こうしたことが事前に発生すれば、このような結果を招くという、合理的な説明が見つかるものです。

もちろん、歴史学においても、大部分の出来事（事柄）は必然的な原因と結果論で説明がつけます。ですが、人間や社会を相手にする歴史学の場合は、科学的分野の学問とは違って、後者の偶然的な原因の占める割合が相対的に大きいのです。つまり、なぜこんな時に、このような予想しえない事態が生じるのかといったことがしばしば発生し、それがその後の歴史過程に大きな影響をおよぼして、歴史の様相を大きくゆりかえるといったことがよくあります。

（中略）

現在の僕は、こうした偶然的な原因が加わるからこそ、歴史学には、えも言われぬ「複雑な面白さ」が生まれる。つまり、すべての歴史事象を合理的に解明できないからこそ歴史学は面白いのだと思っています。そして、こうしたことに思いが至ることで、人間や社会のあり方を決定するのは何かという問題を考えるうえで、たったひとつの単純な視点から物事を判断するのではなく、様々な角度から客観的に判断しうる総合力が身につくのだと考えます。

さらに加筆すると、こうして、必然か偶然かはともかくとして、原因と結果で物事を合理的に考える習慣が身につくと、ありがたい効果もたらされます。現代の社会は、以前よりも説得的に議論できる力（＝コミュニケーション力）が求められるようになりました。とくに近年のように、国際化の時代をむかえ、外国人とも対等な立場で話し合い、相手を明晰な論理でもって説得する必要性がより求められるようになると、このことは、いっそう明らかとなりました。

そして、こうした際には、たとえ難しい交渉相手といえども、感情的ではなく、ウィットとユーモアに満ちた精神の下、論理的に自分たちの考え（方針）を相手側に伝えねばなりません。そうしないと話し合いにならず、最終的に相手側から自分たちの考えを認められることもないからです。

つまり、これは根拠となる史料を提示して、なぜ自分たちがこうした結論に至ったのか、その原因となるものを示す歴史学のあり方と同様です。僕が歴史を学ぶ意義を広く世間一般に訴えるのは、ひとつには、このように実社会でもその手法が応用できる点にあります。

家近良樹『歴史を知る楽しみ－史料から日本史を読みなおす』筑摩書房、2018年

2020年度 自己推薦入学試験(後期)

歴史文化学科	小論文	受験番号					氏名	
--------	-----	------	--	--	--	--	----	--

筆者が述べている「歴史学のあり方」についてふまえて、歴史上の出来事・事象を具体的に1つ取り上げて、その出来事の原因と結果について述べなさい。そのなかであなたが興味深いと思う点について論じなさい。(800字)

